

「ロジャー・マルヴィンの埋葬」の一研究

——臆病者の代償——

“A Study of Hawthorne’s ‘Roger Malvin’s
Burial’ : The Compensation
of a Moral Coward”

重 山 巖

I

Hawthorne が Bowdoin 大学卒業後、Salem に帰り、New England の過去の歴史を素材にして書き上げた一連の作品の中の一つ、短篇“Roger Malvin’s Burial”は最初“The Wives of the Dead”, “My Kinsman, Major Molineux”, “The Gentle Boy”と共に、1832年 *The Token* に掲載され、後1846年 *Mosses from an Old Manse*に収録されたものである。

この短篇は、Hawthorne が New England の過去の歴史に取材したものとはいえ、Indian との戦い、即ち、有名な1725年の Lovell’s Fight(or Lovewell’s Fight) を取り上げた点、他の作品と趣を異にしているといえる。しかし、趣を異にしているのはその点だけで、そこに描かれていることは如何にも Hawthorne 的なものである。

例によって、戦いの場面などというものは全く描かれていない。この五つの部分からなる短篇の極く短い序、第一部で、この戦いのことが言及されているに過ぎず、物語の主要部、第二部から第五部に於いては、第二部で一度“The Indian bullet…”と述べられている位に過ぎない。この短篇の主要部で語られる物語そのものを考えれば、この物語に真実性を与えるため

に、取材したのではなく、逆に、まるで只この戦いを利用するかのような感じで、この戦いに一寸触れているようである。他の作品の場合同様、こういった意味での真実性というものは Hawthorne にとって大した意味はないものといえる⁽¹⁾。

Hawthorne がこの短い第一部をこの短篇の主要部の序とした理由には、上に述べたような真実性を与えるということとは別に、もっと重要な、作者としての Hawthorne の計算された理由があるのである。“The Christmas Banquet”, “The Birthmark”等、Hawthorne の他の作品に見られる序と同じく、この序に於いても、Hawthorne はこの作品の意味、主題といったものを考える時の重要な手掛りを与えているのである。しかし、ここで与えられている手掛りに就いては後述することにする。

只、ここではこの序としての物語の第一部に就いて、次のことを述べるに止めておくことにする。それは Hawthorne が冒頭に

“One of the few incidents of Indian warfare naturally susceptible of the

(1) 史実とこの物語との関係は David S. Lovejoy, “Lovewell’s Fight and Hawthorne’s ‘Roger Malvin’s Burial,’” *New England Quarterly*, XXVII(December, 1954) pp. 527—31. に詳しく述べられている。

moonlight of the romance was that expedition undertaken for the defence of the frontiers in the year 1725, . . .”⁽²⁾

と述べることにより、その生涯変らぬ物の見方、創作態度、novelist としてではなく romancer としての自意識の一端を早くも覗かせているということである。これらは、後 *The Scarlet Letter* (1850) の序、“The Custom-House”, 及び、*The House of the Seven Gables* (1851) の序に於いて、明確に述べられることになっているものである。

この短篇の main body、即ち、第二部から最後の第五部までに、Hawthorne が語っていることは、上記 Lovell's Fight の生き残り Reuben Bourne という人物が、退却の途中、重傷を負った Roger Malvin に説得されて、単身部落に帰還する。彼は Roger に立てた、必ず戻って来てその遺骸を埋葬するという誓いを、以後 15 年間というも果たせず、また、果たさなかったこと、更に、Roger の娘で、彼の許嫁でもあり、後に妻となる Dorcas にこの真相を明かし得なかったし、また明かさなかったこと即ち、誓いと Concealment により彼は孤独で暗い利己的な人間となる。そして、最後に Roger の遺骸のある場所で、Reuben は自分の息子 Cyrus を誤って殺すことにより、救いを得るという物語である。

Hawthorne が Reuben Bourne という人物を通して描いていることは、その置かれた状況に支配されて行く人間の姿であり、そして、そういう人間の抱く罪意識の原因、その結果、

(2) Agnes Donohue(ed). *A Casebook on Hawthorne Question*, (New York, 1963), p.72.

及び救いであると一応解することが出来よう。

Hyatt H. Waggoner が、その著 *Hawthorne: A Critical Study* に於いてこの短篇に就いて “In all of Hawthorne's tales there is perhaps no subtler presentation of certain aspects of the nature of secret guilt—its spring, its nature, and its effects.”⁽³⁾

と述べていることではあるが、この小論に於いては、上述した Reuben Bourne が抱く罪意識をもたらす原因、更にその救いの意味、を考察してみたい。そして、isolation から participation への回帰の問題を、head の対極、heart の問題として捉えている Hawthorne が、この作品に於いて、この問題を如何に考えているかということも合わせて考えてみたい。

II

Reuben が抱く罪意識を彼にもたらした原因を考察するにあたって、次に述べる順序で調べて行くことにする。A. 最初に、先に簡単に述べた彼が誓いを立てなければならなかった経緯を調べ、そのことによってこの誓いの意味を考え、B. 次に、彼が Dorcas にこの真相を明かし得なかった事情を調べ、C. 最後に彼に罪意識を抱かせる真因というものを考えることにする。

A. 1. 先ず、彼が誓いを立てなければならなかった経緯を調べ、そのことによってこの誓いの意味を考える場合、最初に、この物語の発端である第二部の前半、Roger による Reuben 説得の場面に見られる Reuben の姿というも

(3) Hyatt H. Waggoner, *Hawthorne: A Critical Study*, The Belknap Press of Harvard Univ. Press, (Cambridge, Mass., 1955), p.85.

のを調べなければならない。

この説得の場面は大別して二つの部分からなっている。そして、その前半は三つ、後半は四つの段階に分けることができる。前半のⅠ, Ⅱ, Ⅲの説得の段階に於いては、全部 Roger が口を切り、後半は、Reuben が口を切るⅣに始まり、同じく、Reuben が言い出すⅤと、最後のⅥの間に、Roger が口を切るⅥがその間に入れている。即ち、計七つの段階のうち、Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅵの四つは Roger が、Ⅳ, Ⅴ, Ⅶの三つは Reuben が、最初に口を切るという形で、夫々語られている。

しかし、そのいずれの段階で Reuben が Roger の説得を受け入れ、単身逃れて行こうと決意したのか、また、この場面で彼の心の中で葛藤を演じていたのは何か、ということは、はっきりとした言葉では述べられてはいない。それらは、この説得の場面の構成と、この場面を物語って行く、只一つとして無駄な言葉が使用されているとは思われない程巧みな、十分に計算された言葉遣い、とによって、暗示されているものである。

この六つの説得の段階を通じて見受けられる Reuben の姿は、自分の生への願望に負かされ(前半)、その正当化を求める姿(後半)といえよう。即ち、Roger の言葉、自分を残して Reuben 一人逃れば、Reuben は助かるかもしれないから、一人で逃れるようにという言葉を耳にするまで、戦いに出る前、Dorcas に約束して来た通り、⁽⁴⁾ Roger と生死を共にする、少なくとも、しなければならぬと考えて、三日間、重傷の Roger を助けて、荒野を逃れて来た Reuben

(4) Dorcas との約束のことは、説得の第Ⅴ段階で、この物語全体を通じて、一度だけ述べられることになっている。

en が、Roger の言葉により触発された、或いは、醒まされた自己の生への願望に負け、その正当化を、自分自身ではなく、他に、即ち、Roger に求める姿である。

そして、この説得されて行く過程に於いて、特に説得の場面の前半に於いて、彼の心の中で葛藤を演じているのは、己れの生きたいという願望と、居残り、Roger の死を見届け、その遺骸を埋葬しなければならないという義務感であったといえよう。

しかしながら、上述の如く、この説得の場面では、この葛藤をはっきりと述べられ、また、説明もされていない。それは、この処で Hawthorne が描こうとしている Reuben の姿というものが、己れの生きたいという願望に打ち負かされていく Reuben の姿を、Roger と Reuben との会話の遣り取りのうちに暗示し、表現しようとしたためといえよう。

また、この説得の場面では、何故 Reuben が、自己の生への願望に屈し、その正当化を他に求めるのか、その理由もはっきりとは述べられていない。それは、その理由の解明の鍵を、序で暗示し、物語の第三部で与えることにした Hawthorne の作者としての計算であり、またこの場面そのものを書くに当って、立てた彼の計算であったといえよう。

〔説得の場面の前半〕

ここでは、Roger の言葉を契機として、(説得の第Ⅰ段階)、居残り、Roger の死を見届け、その遺骸を埋葬しなければならないという義務感を、father-in-law to be としての Roger の願いに従わなければならないという義務感に(第Ⅱ段階)、その娘であると同時に自分の許嫁でもある Dorcas に対する、Roger の言葉により示め

された、義務感に（第Ⅲ段階）、すり替えられ、また、すり替えてしまう Reuben の姿が描かれている。

〔説得の第Ⅰ段階〕

説得の第Ⅰ段階に於いては、荒野の大きな岩の下で傷の痛みで余りよく眠れなかった Roger の口を通して Reuben に語られるという形で、二人の置かれた状況が述べられる。

“Reuben, my boy, . . . this rock beneath which we sit will serve for an old hunter’s gravestone. There is many and many a long mile of howling wilderness before us yet; nor would it avail me anything if the smoke of my own chimney were but on the other side of that small swell of land. The Indian bullet was deadlier than I thought.”⁽⁵⁾

この言葉に対して Reuben はそれを三日間の荒野の放浪の故にして取り合わない。それに対して Roger は次のような、その状況から考えて、彼の立場からすれば、極めて妥当な提案をする。

“There is not two days’ life in me, Reuben, and I will no longer burden you with my useless body, when you can scarcely support your own. Your wounds are deep and your strength is failing fast; yet, if you hasted onward alone, you may be preserved. For me there is no hope, and I will await death here.”⁽⁶⁾

この提案も Reuben の言下の拒否にあって

しまう。

ここに引用した二つの Roger の言葉は、上に述べたように、冷静に自分達の置かれた状況を判断した言葉であり、また、冷静な判断に基づく、その場に相応しい提案であったと解釈される。その理由は、彼の言葉の中にいわれている Reuben 一人だけなら助かるかもしれない、また、その言葉の中に述べられている訳ではないが、この説得の場面全体を通じて見受けられる Roger の真摯な説得の態度から判断して、Reuben だけは助けたいという気持以外に、Roger に上に引用した言葉をいわせる理由はないからである。また、Reuben のうちに見出される Roger にそういうことをいわせる理由を Hawthorne は何一つ書いていないこと、更に、Hawthorne が先の Roger の言葉に対して、前者には、“said he [= Roger]” 後者には “said the other [= Roger] *calmly*”⁽⁷⁾ と書いていることもその理由になり得るといえる。

仮に、細心の注意を払って説得して行く、Roger の、後で述べる Reuben の性格を見抜いた上での、提案であったにしても、その妥当性は少しも損われる処はない。

Roger は、その説得に於いて、感情の動きというものを見せはしても、終始一貫して、この冷静な状況判断から出た彼の提案を Reuben が受け入れるよう、考えられる総ての手段を用いて、Reuben を説得して行くのである。

一方、Hawthorne が上に引用した Roger の言葉、第一の言葉に対しては “replied the youth [= Reuben]”, 第二の言葉に対しては “said Reuben *resolutely*.”⁽⁸⁾ と書いて、夫々 Reuben

(5) A. M. Donohue, *op. cit.*, p. 73.

(6) *Loc. cit.*

(7) *Loc. cit.* Italics are mine.

(8) *Loc. cit.* Italics are mine.

に拒否の言葉をいわせていること、及び、上述の Roger にあつたことをいわせる理由を Hawthorne が何一つ書いていないことから考えれば、Reuben は、先にも述べた如く、Roger の言葉を聞くまでは、Dorcas に誓ったように、Roger と生死を共にしようと考えていた、断固そうすべきだと考えていたと解される。或いは、生への願望を必死に押えていたというべきかもしれない。また、押さえてなかったともいえる。兎に角、ここまでは Reuben は Roger と共に生き、逃れて来たのであるから。

しかし、Roger の言葉には、何処にも一人で行けば Reuben は絶対に助かるということとは述べられていない。又 Reuben は断固としてその提案を退けている。それにもかかわらず、Roger の言葉は Reuben に対して全然影響を与えなかった訳ではない。それは説得の次の段階で暗示されることになる。

〔説得の第Ⅱ段階〕

さて、先の第Ⅰ段階をいわば説得の準備の段階と見れば、Roger の本当の、巧妙な説得は、この第Ⅱ段階から始まるといえよう。

Reuben は、先の Roger の提案と説得といういわば外部からの刺戟によって、触発された、醒まされた、或いは、揺り動かされた、生への願望、二人ではなく、自分一人だけは生きれるかもしれないと変ってしまった、生きたいという願いに、上述の Roger と生死を共にすべきだという考えを、浸蝕されて行く姿を呈する。

この第Ⅱ段階では、Roger が、Reuben の上述の断固とした拒否に対して、“No, my son, no,” と呼びかけることにより、father-in-law to be が son-in-law to be に訴えるという形式にな

っている。Roger は次のように述べている。

“... I have loved you like a father, Reuben; and at a time like this I should have something of a father's authority. I charge you to be gone that I may die in peace.”⁽⁹⁾

この言葉に対して Reuben は、Roger が父ならば自分は子として、彼を置き去りにすることは出来ないと答える。しかし、それを Hawthorne が

“And because you have been a father to me, should I therefore leave you to perish and to lie unburied in the wilderness?”⁽¹⁰⁾

と疑問文の形式でいわせていること、また、それを “exclaimed the youth” と叫ばせていること、更に、Reuben に

“No; if your end be in truth approaching, I will watch by you and receive your parting words. I will dig grave here by the rock, in which, if my weakness overcome me, we will rest together:...”⁽¹¹⁾

とこれまで彼の頭の中を占拠して来た義務感に基づく考えをいわせながらも、この言葉に続いて、

“or, if Heaven gives me strength, I will seek my way home.”⁽¹²⁾

といわせていることから考えれば、この説得の第Ⅱ段階で、Reuben の心の中では、既に変質してしまった生への願望と、Roger の死を見届け埋葬しなければならないという義務感との葛

(9) *Ibid.*, p. 74. Italics are mine.

(10) *Loc. cit.*

(11) *Loc. cit.*

(12) *Loc. cit.*

藤が生じていて、Reuben の上に引用した返答は、我が身に引き替え、Roger の父としての Reuben に対する真摯の情、その一人安らかに死にたいという願いに対する Reuben の反撥の言葉と解される。

〔説得の第Ⅲ段階〕

ここでは、上に引用した自分の言葉の Reuben に対する効果を見て取った Roger は、更に追い打ちをかけるように、娘の Dorcas を用いて説得を行っている。と同時に、惘眼の Roger は、——それは本当に私心なく、死を決意した人間の持つ鋭さといえるものかもしれないが——Roger は、Reuben の心の中の葛藤までも宥めようとまでもしている。

Roger は、人が人間の住む処で死ぬ場合と、このような場所で一人死ぬ場合の違いを述べた後、次のように Reuben が躊躇うことなく一人逃れて行くように勧めている。

"Tarry not, then, for a folly like this, but hasten away, if not for your own sake, for hers who will else be desolate."⁽¹³⁾

この言葉は Reuben に対して非常な影響を与えずには置かなかった。

"... their [Malvin's last few words] effect upon his companion was strongly visible.

They reminded him that there were other and less questionable duties than that of sharing the fate of a man whom his death could not benefit. Nor can it be affirmed that no selfish feeling strove to enter Reuben's heart, though the consciousness made him more earnestly resist

his companion's entreaties."⁽¹⁴⁾

ここで Reuben は、Roger の、自分のため、Reuben のためではなく、Dorcas のためという説得の言葉により、殆んど完全に説得されてしまうのである。

この説得の場面の前半に於いて、Reuben は意識的には Roger の説得に対して抗いながらも、少くとも自分一人は生きられるかもしれない、また、生きたいという願望によって、死を見届け埋葬しなければならないという義務感を征服され始め、と同時に殆んど完全に征服されてしまうのである。その結果一人 Roger を置いて行こうという決意までも説得の第Ⅲ段階でしてしまったと考えられる。⁽¹⁵⁾

それを証拠に、Hawthorne はこの説得の場面の前半の最後の段階に於ける Roger の言葉に対する反撥の言葉を Reuben にいわせていない。また、次に述べる説得の場面の後半、即ち、第Ⅳ段階では、今度は Reuben の方が先に口を切り、Roger に説得される形式になっていることもその証拠になるといえよう。

それにしても、Reuben は何故これ程容易に Roger に説得されてしまったのだろうか。何故、先の第Ⅱ段階に見られた Reuben の反撥の言葉は、それが最初であり、しかも最後でしかなかったのだろうか。こういった問題がこの説得の場面の前半に於いて生じるが、その解答

(14) *Loc. cit.* Italics are mine.

(15) この決意に関しては、Hawthorne は只説得の最後の段階で次のように述べているだけで、その前のいずれの段階でもその事実を暗示するに止め、何も語ってはいない。

"This example, powerful in affecting Reuben's decision, is aided, unconsciously to himself, "*Ibid.*" p. 76. Italics are mine.

(13) *Loc. cit.* Italics are mine.

はこの時点に於いては得られない。この問題は、Hawthorne が間接的にその解答の鍵を与えている物語の第三部を述べる時に譲ることにする。

〔説得の場面の後半〕

先の引用文(14)に於いて、Hawthorne が “Nor can it be affirmed that no selfish feeling strove to enter Reuben’s heart,…” と述べていることから分るように、一人行こうと決意した Reuben には是非とも納得させなければならない問題があった。それは、相手の Roger に関する問題ではなく、飽く迄もそういった決意をした自分に関する問題であった。このこと自体問題になることであるが、その問題とは、己れの決意と、恐らくその決意と同時に見たであろう Dorcas との将来の幸福な生活の夢、——Reuben がこういう夢を見たということは何処にも説得の場面には書かれていないことであるが——そこに彼が感じ取った、自分は、‘selfish’ではないかという問題である。事實は、その置かれた状況の如何にかかわらず、その通りであったのだ。

しかし彼の性格には、この己れの問題を飽く迄も追求し得ない原因があった。——この問題は、この物語の解明の鍵を与える問題であるが、後述することにする。——それ故、この説得の場面の後半に於いて見受けられる Reuben の姿というものは、先にも述べたように、己れの決意とそれに伴うことになる行為を正当化する理由を、自分自身ではなく、他に、Roger に求める姿でしかあり得なかったのである。

〔説得の第Ⅳ段階〕

上述の如く、Reuben は一応決意はしたもの

の、彼には、その決意を行動に移す以前に、是非とも納得させなければならない問題があった。しかし、それは、彼の致命的な性格の故に、自分自身で納得させることのできない問題であった。

そういった性格の故に、彼の最初に口を突いて出て来た言葉は、言葉の表面では、このような場所で一人死を待つ Roger の運命に対する恐怖を述べながら、その実、密かに、己れの決意に対して、Roger に、自ら進んで自分を説得しようとしている Roger に、同意を求める言葉でしかあり得なかったのである。

“How terrible to wait the slow approach of death in this solitude!” exclaimed he. “A brave man does not shrink in the battle; and, When friends stand round the bed, even women may die composedly; but here”——(16)

彼は、全然この物語に於いて述べられていないインディアンとの戦いに於いて、ここに述べられているように、勇者であったかもしれない。しかし、彼は本当の意味で勇者であったろうか。

Reuben は、今、このような状況に於いて發揮される、Roger の真の勇氣、本当の generosity というものを理解することが出来ないし、もう決意までしてしまった今は、理解することを拒んでしまっているともいえる。

上に引用した Reuben の言葉に対して Roger は、その裏の意味もはっきりと汲み取り、再び、Reuben の生への願望を刺戟し、更に、彼の内面の問題にまでも解決を与えてやろうとする。Roger は皆までいわせずに、Reuben の

(16) *Ibid.*, p. 74. Italics are mine.

言葉を遮り、次の様に述べている。

“I shall not shrink even here, Reuben Bourne,” interrupted Malvin. “I am a man of no weak heart, and, if I were, there is a surer support than that of earthly friends. You are young, and life is dear to you. Your last moments will need comfort far more than mine; and when you have laid me in the earth, and are alone, and night is settling on the forest, you will feel all the bitterness of the death that may now be escaped. But I will urge no selfish motive to your generous nature. Leave me for my sake, that, having said a prayer for your safety, I may have space to settle my account undisturbed by worldly sorrows.”⁽¹⁷⁾

この言葉を耳にしても、Reuben は、自分が説得の第Ⅱ段階で述べた言葉⁽¹⁸⁾ も思い出さないうし、また、思い出せもしない⁽¹⁹⁾。彼は、“a surer support” も信ずることも出来ない。Roger が Reuben のこととして語っている、もし彼が居残れば、彼を襲うことになる運命が、結局、Roger 自身の運命のことでもあるにもかかわらず、己れの生きたいという願いと死の恐怖に捉えられた Reuben は、己れの決意を翻そうともしない。彼は Roger の言葉通り“generous nature” を本当に持っていたといえようか。彼は Roger に “I will urge no selfish motive. . . Leave me for my sake, . . .” という言葉を最後に得て、自分の決意は Roger の

ためであって、そこには何等 “selfish motive” はないのだという、自分の決意に対する正当化の理由だけを、Roger の言葉に見出すことで、Roger の同意を求めることは止めてしまう。

〔説得の第Ⅴ段階〕

ここでは、前の段階を受けて、Reuben は Roger に Dorcas に対する言い訳を聞くことになっている。それは、彼をして決意せしめた、生への願望に次いで、或いは、同じ程度に、重大な関心事であったのであるから、当然のことといえよう。彼は生きて Dorcas の元に帰ることしか、今は考えてもいなければ、また望んでもいなかったといえよう。

Reuben は、Roger を命を賭けて守ると誓って来た Dorcas に対する弁明として、Roger から、彼が説得の第Ⅰ段階で述べたことと主旨を同じくする事柄を彼女に説明し、彼の真剣な懇願によって、一人帰って来たというようにいわれる。

しかし、Reuben は、最後に、Roger により、前に述べた、恐らく Reuben も見たであろうといい得る、夢のことをいわれてしまう。その理由は Roger の Reuben と Dorcas との幸福な生活が見えるようだという言葉を聞いた後の Reuben の姿が変わったことである。

“...but, when he[=Roger]sank exhausted upon his bed of oak leaves, the light which had kindled in Reuben's eye was quenched. He felt as if it were both sin and folly to think of happiness at such a moment.”⁽²⁰⁾

これまで自分の決意を実行に移すにあたっ

(17) *Loc. cit.*

(18) 先の引用文 11.12 参照

(19) このことは先に述べた引用文 11, 12 に対する私見の拠り処となっている。

(20) *Ibid.*, p. 75.

て、自分を満足させるだけに足る理由を、自分自身のためではなく、Roger のため、Dorcas のためと Roger にいわせることによって、自分の良心を刺戟することを避けて来た Reuben はここで自分の一番痛い処を、Roger の言葉により突かれ、良心の痛みを感じたといえる。そしてこの良心の痛みは 15 年間彼がその誓いを果すまで止むことのないものとなるべきものであった。

〔説得の第Ⅵ段階〕

上に引用した文に見られる、自分の最後の言葉により生じた Reuben の表情を見て、Roger はその説得の第Ⅵの段階に入って行く。彼はここで Reuben の関心をその良心から逸らしてしまおうとする。

"His companion [=Malvin] watched his [Reuben's] changing countenance, and sought with generous art to wile him to his own good."⁽²¹⁾

Roger は Reuben が途中で救援隊に出会い、自分も助かるかもしれないということを述べる。良心の痛みはとも角、自分一人でも生きたい、生きて Dorcas の元に帰りたいと願う Reuben は、Roger がこの言葉を "a mournful smile" を浮かべながらいっていることには気が付かない。Reuben はこの Roger の言葉を聞いて、

"Surely there is reason, weighty reason, to hope that friends are not far distant."⁽²²⁾

といて、手もなくひっかかり、飛びついてしまう。そしてこの殆んど僅かな可能性に己れの決

意とそれに伴う行動を正当化する理由を闇雲に見出そうとしてしまう。

"No merely selfish motive, nor even the desolate condition of Dorcas, could have induced him to desert his companion at such a moment—but his wishes seized on the thought that Malvin's life might be preserved, and his sanguine nature heightened almost to certainty the remote possibility of procuring human aid"⁽²³⁾

〔説得の第Ⅶ段階〕

再び、Reuben が口を切る。ここで、彼は、もし Roger が自分と同じ立場だったらどうかと、性急に尋ねることにより、その間に関しては一応の満足が行く解答を得る。

これで説得の場面の後半は終わっている。

結局、この説得の場面全体を通して見られる Reuben の姿というものは、最初にも述べたように、Roger に説得され、また、自ら進んで説得されてしまう姿であった。しかし、彼には問題が残っていたのである。それは、自分の決意とそれに伴う行為の正当化を Roger に求めることにより、彼が回避してしまったことに暗示される彼の性格に基因する問題である。彼は、Roger からは自分の良心を満足させるに足るだけの理由を、まして、それが Dorcas に対する背信行為となるものであっただけに、得られなかったのである。

得られなかったが故に、彼は、以後 15 年間もの間、再三再四、自分の行為は正当であったと考える訳である。しかし、彼の head に於け

(21) *Loc. cit.* Italics are mine.

(22) *Loc. cit.*

(23) *Loc. cit.*

るこの考えは、Hawthorne が “Earth’s Holocaust” の中で述べているように、⁽²⁴⁾ 彼が最後に誤って息子を殺すことによってしか、遂に、その heart に解決をもたらす得ない問題であったのである。この意味で、彼は Hawthorne の head に属する一連の人物の一人であったといえる。

以上述べて来たことで、Reuben が誓いを立てなければならなかった経緯に就いて、大体の調べは終わったものと思われる。

A.2. 次ぎに、物語の第二部の後半で Reuben が一人で、そして、Roger に対しても立てる誓いの意味を考えることにする。

先の説得の場面の最後のⅦ段階で、Reuben は Roger に自分の決意の正当化を求めることを止めてしまう。そして、(物語の第二部の後半) Reuben は、完全に自分が正しいことをしているとは信ずることのできないまま、(…

(24) Malcolm Cowley(ed.), *The Portable Hawthorne*, (New York, The Viking Press, 1948), p. 209

“The heart, the heart. . . there was the little yet boundless sphere wherein existed the original wrong of which the crime and misery of this outward world were merely types. Purify that inward sphere, and the many shapes of evil that haunt the outward, and which now seem almost our only realities, will turn to shadowy phantoms and vanish of their own accord; but if we go no deeper than the intellect, and strive, with merely that feeble instrument, to discern and rectify what is wrong, our whole accomplishment will be a dream, so unsubstantial. . .”

half convinced that he was acting rightly . . .), 彼は、以後15年間彼につきまとして、離れることのなかった、必ず戻り、Roger の遺骸を埋葬するという誓いを立てることになるのである。

彼は自分一人だけでも、また、それは後で Roger によっても誓わされることになってしまうのだが、自分一人だけでも、この誓いを立てなければならぬ理由が彼にはあったのである。即ち、この誓いを立てることによって、先の説得の場面で、彼が回避した問題、納得の行かなかった問題の埋め合わせを計ったといえる。また、この誓いに述べられていることだけを考えれば、Reuben が説得の場面で自分にとって一番大事な問題を回避してしまったことに伺える彼の性格と同じものが伺え、彼はこの時なすべきことを時間的にずらすことにより、自分を、積極的に欺こうとしたとはいえないかもしれないが、納得させようとしたといえよう。

しかし、このような誓いを立てることによっても、彼は自分の良心を満足させることはできる筈がなかった。彼は、説得を終えて、それまでの態度をすっかり諦めの態度に変えてしまった Roger から、Docas への祝福の言葉を聞いて、心を打たれるが、Roger の元を立ち去る歩調を彼は早めない訳にはいかなかったのである⁽²⁵⁾。

処で、Reuben の回避した問題とは何にか、

(25) A. Donohue(ed.), *op. cit.* p.78. “...a sort of guilty feeling which sometimes torments men in the most justifiable acts, caused him to seek concealment from Malvin’s eye.”

何故回避しなければならなかったのか。何故、Roger の説得の場面で見せた勇気ある毅然とした態度とは打って変わった態度を見せられながらも、只心の痛みを感じずただであったのか。また、どうしてその痛みを Roger に対する誓いで埋め合わせようとしたのか。どうして自分の生きたいという願い、Dorcas との幸福に寄せる希望に抗し切れなかったのか⁽²⁶⁾。こういった問題は、物語の第三部に於いて述べられる彼の Concealment を不可避的にするものであり、また、彼の罪意識と密接に関係するものであるが、Hawthorne はこういった問題に対してはっきりとした解答をここでは与えていない。只、この問題に共通して伺える Reuben の何か性格の弱さを、説得の場面の構成、言葉遣い、真の勇者 Roger と彼との対比、といったことで暗示しているに過ぎない。

只、この時点に於いていえることは、彼の罪意識の本当の原因は何か彼の性格の弱さであろうといえるだけである。しかし、説得の場面では、Roger の口を通し、また、それに続く場面では、Reuben は心のうちではもう再び生きて Roger に会うことはあるまいと信じていたということを述べる言葉に続いて、Hawthorne は ‘generous’ 或いは “His generous nature…” と述べ、Reuben が寛大であることを強調しているようだが、これは irony of statement であって、もし本当に彼がその言葉通り寛大であったならば、Roger を置き去りにする、少くと

もああいっただけで置き去りにすることは考えられない。従って彼のこの性質は彼の罪意識の本当の要因とはなり得ないものと解することができよう。本当の要因は、これも直接的ではないが、可成り明確に第三部で述べられているのである。

B. 次に、Reuben が抱く罪意識をもたらし原因となる物語の第三部の Concealment の場面を調べることにする。

第二部で、我々はその置かれた状況により押し流されて行く Reuben の姿を見たが、この第三部の Concealment の極く短い場面に於いても、彼は同じくその置かれた状況に押し切られてしまう姿を見せることになる。

Reuben は、良心の痛みと誓いとを抱いて、部落へ、Dorcas の元へ生還する。Roger の元を去る時、彼の生命が後幾許もないということを知っていた Reuben が救出されたのは、木の下で彼も死を待ち、横たわっていた2日目のことであり、その上、彼の意識が回復するのに数日を要してしまっていて、彼は Roger を救出に人をやる機会を失ってしまっている。

彼が Dorcas に、ひいでは村の人達に真実を明かせなく、また、明かさなくなる経緯は、父の安否を尋ねる Dorcas との会話の遣り取りの中に語られている。その会話の際、彼の取った態度、また、その言葉——それはそれで真実なのであるが——にその責任が大いにある訳だが、父の死を予測してただけに、彼女に、彼が彼女に誓った通り、父の死を見届け、埋葬して来たものと早合点されてしまうのである。そして、村の人々からもとても耐えられない程の賞賛を受ける破目になってしまうのである。

(26) *Ibid.*, p. 77. “His generous nature would fain have delayed him, at whatever risk, till the dying scene were past; but the desire of existence and the hope of happiness had strengthened in his heart, and he was unable to resist them.” Italics are mine.

彼は Roger のことを Dorcas に語って行き
肝心な処に来た時、即ち、

“...awaking at sunrise on the fourth
day, I found him faint and exhausted; he
was unable to proceed; his life had ebbed
away fast; and —”(27)

と述べて来た時、Dorcas の “He died!” という言葉に先きを越されてしまう。確かに、彼はもう死んでしまっているのである。この彼女の言葉を聞いて、自分のためではなく、Roger のため、Dorcas のため、Roger を救出するためと自らを思い込ませて逃れて来た Reuben は本当は自分の “selfish love of life” に負かされて、Roger の死を見届けもせず逃れて来たのだということを認めることは出来ないと思ってしまう。そこで彼は口をつぐんで、恥しさと疲れとで枕に顔を埋めてしまう。処が Dorcas は彼の態度を自分のいった言葉の真実を証明するものとしてしまう訳である。

次に、Dorcas に Reuben が父の亡骸を埋葬して来たかと尋ねられる。しかし、その言葉、

“You dug a grave for my poor father in
the wilderness, Reuben?” (28)

という、その反対のことは考えられないような彼女の、“filial piety” を表わす言葉に抗し切れず、Reuben はいかにも彼女が誤解しそうな言い方で、

“My hands were weak; but I did what-
I could, ... There stands a noble tomb-
stone above his head; and I would to Heav-

(27) *Ibid.*, p. 79.

(28) *Ibid.*, p. 80.

en I slept as soundly as he!” (29)

と答えてしまう。確かに、彼は自分の出来ること、出発の前に Roger の食糧として木の根や草を集めもした、また、その姿勢も直もした、その上御丁寧に密かに舞い戻り一人残された Roger の姿を窺い見もした。しかしその際、“conscience, or something in its similitude” の懇請に従って、Roger の元に戻り、死を見届け、埋葬すること、今 Dorcas の一番の関心事だけはして来なかったのである。

彼のこの言葉を聞き、Dorcas はそれ以上尋ねることは止めてしまう。

こうして、この極く短い Concealment の場面は終わっている。そして、この Concealment という、いわば、一つの行為が、Concealment をした Reuben にも、また、Concealment をさせた Dorcas にも、夫々の分に応じた責めを負わせることになる。

ここで、物語の第五部で、何故 Hawthorne が Dorcas が “a lonely woman in a crowd who cared not for her” と書いているのか、また、どうして彼女も息子の Cyrus を失わなければならなかったのかということに就いて述べておきたい。

上に見て来たことから分るように、この Concealment の場面は、Dorcas に就いていえば、その責任の大半は Reuben にあるのであるが、彼女の一方的誤解に終始しているといえる。この彼女の一方的誤解は、彼女の父 Roger の安否を気遣う子としての嘘偽りのない気持から出たものである。それ故に、彼女の以後

(29) *Loc. cit.*

15年間味合うことになる孤独の生活——それは先に述べた言葉 (a lonely woman...) 位でしか表現れされていないが——その孤独の生活というものは、Reuben のそれとは異なったものとなっていたことであろうといえる。しかし余りにも父を想う気持から、Reuben に対して、自分に対する誓い以外の行動を考えられなかったことにより、矢張り、彼女もそれなりの報いを受けたのである。相対立する二つのもの、例えば、good と evil, head と heart といったものに対して、常に微妙なバランスを考えている Hawthorne には、Dorcas のこの態度も決して見逃し得ないものだったといえよう。彼女のこの場面に見せた態度、しかも、物語の第五部で語られているように、15年過ぎた後までも、変わることもなかった態度、父を想う余りに、仮に Reuben が彼女が考えてた通りにして来ていたとすれば、彼が見舞われたであろう運命、苦難に思い到らなかつたこと、また、父に対する情故に、Reuben を理解出来ず彼を Concealment に追いやってしまったこと、これが後に償わなければならなかつた彼女の犯した過ちである。彼女は結局自分を中心にしてしか、自分がこうあるべきだという考え方によってしか、物事を見ることができなかつた人間であったといえる。それ故第五部に見られる、息子 Cyrus に対する考え方もそういった彼女のものの考え方に沿ったものでしかあり得ないのである。

一方、この Concealment の場面に見られる Reuben の姿は、物語の第二部で用意された線上を歩いて行く姿でしかなかったのである。彼は第二部で誓いを立てることにより、その時なすべきことを回避、延期したように、ここでも Concealment ということにより、再度、己れ

のなすべきことを、いわば、延期してしまうのである。

以上述べてきたことが、Reuben が Dorcas にことの真相を明かし得なかつた場面に見られる彼に罪意識を抱かしめる事情である。

C. これから、彼に罪意識を抱かしめる真因——今まで幾度も後回しにして来た彼の性格のうちに潜む真因に就いて述べることにする。

Concealment が、Reuben が少くとも head の level で正当であったと考える Roger を置き去りにした行為に、“secret sin” を犯した感じを与え⁽³⁰⁾、そのことにより新たな意義の加わった、絶えず遂行を求める誓いを果さなかつたことにより、Reuben は孤独で暗い人間になって行った⁽³¹⁾と Hawthorne は書いている。確かに、この Concealment と誓いは、15年間、絶えず、彼の意識にあって、彼を苦しめて

(30) *Loc. cit.* “...concealment had imparted to a justifiable act much of the secret effect of guilt; and Reuben, while reason told him that he had done right, experienced in no small degree the mental horrors which punish the perpetrator of undiscovered crime. By a certain association of ideas, he at times almost imagined himself a murderer.”

(31) *Ibid.*, p. 81. “There was...a continual impulse, a voice audible only to himself, commanding him to go forth and redeem his vow;...But year after year that summons, unheard but felt, was disobeyed. His one secret thought became like a chain binding down his spirit and like a serpent gnawing into his heart; and he was transformed into a sad and downcast yet irritable man.”

いる。そして、この二つのものが彼に罪意識を抱かせる原因となっているようではある。しかし、これらは、誓いと Concealment といういわば形に現われた結果、これから述べる真因から派生したものに過ぎないのである。

その本当の原因とは、彼の性格の本質、即ち Hawthorne のいう彼の “moral cowardice” にあったのである。彼の本質が臆病者であったということがその真因なのである。

Hawthorne は Reuben と Dorcas との結婚を述べた後、次のような文章を書いている。

“There was now in the breast of Reuben Bourne an incommunicable thought—something which he was to conceal most heedfully from her whom he most loved and trusted. *He regretted, deeply and bitterly, the moral cowardice that had restrained his words when he was about to disclose the truth to Dorcas; but pride, the fear of losing her affection, the dread of universal scorn, forbade him to rectify this falsehood.*”⁽³²⁾

これは、直接的には、Concealment に見られた Reuben の姿、それ以後 15 年間にわたって見られる彼の姿を説明し、間接的には第二部に見られた彼の姿を説明する文でもあるといえよう。

この彼が moral coward であったということが、彼にたとえその事情がどうあれ concealment を行わせ、また先に Roger の元を去らせたのである。何故ならば、彼が moral cow-

ard であるからこそ、Roger が一人で行けば Reuben は絶対に助かるとはいっていなかったのにもかかわらず、直に自分一人は助かりたいという願いに心を動かされ、説得されると同時に一人行くことを決意し、自分の決意とそれに伴う行為の正当化を自らに求めることはできずに Roger に求め、Roger の示す真の勇気を理解できず、自分の言葉通りに共に残り、後は運を天にまかせることもできず、自分の生への願望と幸福の夢に負け、誓いというものによってその時なすべきこと、真に勇気のいることを時間的にずらすことにより自己を欺き、彼は良心を満足させることもできないまま、一人逃れ得たのである。また、Hawthorne は “a wild and painful curiosity” とその時述べているが、この同じ理由で、Reuben は Roger の勇気を信ずることができずに、密かに戻って Roger の姿を窺う訳なのである。Concealment の場面に於いても同様で、この臆病者、Reuben は Dorcas に “My father, Reuben?” といわれただけで、顔をおおい、(His first impulse was to cover his face,⁽³³⁾) 真実を明かそうとするが、結局できずに終わってしまったのである。

その置かれた状況でもなく、その置かれた状況に於いてなした行為でもなく、彼のこの “moral cowardice” が彼に罪意識をもたらす本当の、彼自身の内に宿す根本的原因であったのである。彼が罪意識を抱くのは、彼が臆病者であるが故に、良心の命ずる声に従えずに、Roger の元を去ったためである。Hawthorne は彼のこの行為を “a justifiable act” とはいっ

(32) *Ibid.*, p. 80. Italics are mine.

(33) *Ibid.*, p. 82.

でも、決して a *just act* とはいっていない。これが彼の犯した最初の過ちである。そして、この最初の過ちから必然的に続く *Concealment*, この *Concealment* したことにもよる誓いの遂行の延期は、彼が臆病者であったために重ねて犯した過ちである。そして、彼は 15 年間、後の過ちにより常に最初の過ちを想起させられるのである。即ち、彼にあっては最初の過ちは常に *Past* でなく *Present* であったといえる。従って、彼に最初の過ちを犯させた、臆病者であるが故に良心の声に従えなかったということ——これは彼の抱く罪意識の核心をなすものと考えられる——が絶えず問題となっていたといえる。

しかし、この問題は、只単に彼の臆病と良心だけではなく、彼の良心と心の葛藤をも彼の内面に生じさせた問題となっているものであるから、如何に彼が *head* の *level* で自分の最初の行為は正当であったと考えることによって解決しようとしてももともと解決のできる問題ではなかったのである。この問題の解決のためには、良心の声に従えなかった原因、彼の実体、臆病 "*moral cowardice*" というものと対決し克服しなければならなかったのである。しかし、彼は真実臆病者であるためこの己れの弱さに真正面から対決できず、その弱さに振り回わされて行く人間でしかなかったのである。それ故、彼はこの最初の過ちの償い、即ち、誓いの遂行を延期せざるをえず、また、延期できたのである。この同じ理由で、その誓いを果たす行為も、彼には偶然の事故でしかあり得なかったのである。

III

最後に、残された彼の救いの問題、たとえそれが事故であるにもせよ、*Reuben* にその息子

Cyrus を殺さずことによって、*Hawthorne* が *Reuben* を救われたとする意図は何処にあるのかということを考えてみたい。

一般にいわれているように、*Hawthorne* の作品では、その犯した罪よりも罰が如何に重いとはいえ、*Reuben* の場合、息子を殺すということは、それをそのまま事実として受け取れば、その罪と罰のバランスから考えて如何にも重過ぎるのである。矢張り、我々は *Cyrus* を殺すということ、*Cyrus* を単に *Reuben* の息子というのではなく、そこに何か別の象徴としての意味と役割を読み取らなければならないだろう。

処で、*Reuben* に取って *Cyrus* はどのようなものであったのであろうか。その鍵は第三部の終りに述べられている。彼は 15 年の歳月の経過のうちに、前にも述べたように、孤独で利己的な人間になって行く。そういった彼にとって息子の *Cyrus* が彼の愛の対称であったということがいわれている。

"The boy was loved by his father with a deep and silent strength, as if whatever was good and happy in his own nature had been transferred to his child, carrying his affection with it...*Reuben's* secret thoughts and insulated emotions had gradually made him a selfish man, and he could no longer love deeply except where he saw or imagined some reflection or likeness of his own mind. In *Cyrus* he recognized what he had himself been in other days; and at intervals he seemed to partake of the boy's spirit, and to be revived with a fresh and happy

life.”⁽³⁴⁾

このことから分かるように、Cyrusは Reuben にとって、息子であると同時に、自分の分身であったということが出来る。しかも、自分と同じ“moral cowardice”を持った分身であったのだ。

だから、Cyrusを殺したということは Reuben が自分の分身、自分の“moral cowardice”を持った分身、見方を交えれば、自分の“moral cowardice”と偶然対決し、それを克服したことを意味すると考えられる。そして、そのことにより、彼の良心、heartも始めて安らぎを得るのである。(Then Reuben's heart was stricken,・・・)。

ここで、Hawthorne 一流の isolation と、head と heart との関係に見られる図式的考え方から考えれば、Reuben は己れの臆病の故に犯した過ちにより罪意識が生じ、その為に彼の heart は頑なになり、所謂、“Ethan Brand”で Hawthorne が述べるところの“the magnetic chain of humanity”⁽³⁵⁾の抛り処を Reuben は心から失いかけ——彼は Ethan Brand と違いその最後の運命が全然異なるから、完全に失ったとはいき切れない——isolation の世界に落ち込む。そして、彼はその解決を head に頼るがそれは得られることではなかった。何故ならば、Hawthorne にとっては heart の問題に関しては head は無力なものでしかないからだ。しかし、最後に彼の抱く罪意識の根

源、臆病を、Cyrus を殺すという形で、克服出来、そのことにより彼の頑なになった心も打ちくだかれて、彼は救いを得るのである。

こういった意味合いに於いて、Hawthorne は、本当に moral coward な Reuben が息子を誤り殺すことにより、彼が救われたと考えたのであろう。

Roger Malvin の遺骸のある大きな岩とは、Waggonerもいっているように、“gravestone”であると同時に、Reuben が自分の分身 Cyrus を捧げる altar でもあったのである。

そして、これまでの 15 年間の苦しみと合わせて、最後に息子までも殺さなければならなかったことは、たとえ、それが上に述べたように象徴的に使われていたにせよ、この真実臆病者 Reuben が支払わなければならなかった代償であったのである。

IV

isolation から participation への回帰の問題を本質的には head に対する heart の問題として捉えられている Hawthorne は“The Christmas Banquet”に於いては何も感ずることのできない“marble”でできた Jervays Hastings の心を、或いは、“The Birthmark”に於いては“love for his young wife”に先行する Aylmer の“love of science”を主題としたように、“Roger Malvin's Burial”に於いては、人間のもつ、Reuben のもつ“moral cowardice”を主題としているといえる。そして、そのことは、序に於いて、巧妙に計算された筆致で、与えられている手掛りのうちに見出されることである。その手掛りとは Hawthorne が、“Lovell's Fight”に関連づけて三度“the heroism of a little band”, “The open bravery”, “civilized ideas of valor”

(34) *Ibid.*, p. 72.

(35) M. Cowley (ed.), *The Portable Hawthorne*, The Viking Press, (New York, 1948), p. 257.

という言葉を使用した後 “... chivalry itself might not blush to record the deeds of one or two individuals.” (36)

と述べていることである。

処で、上の “heroism” は “bravery” の上に成立し、“valor” と “bravery” は同じことを意味している。それ故、この物語は “The open bravery” に関するものであるということがここで暗示されている。そしてこの引用文に述べられていることに、これから登場する人物は広く人に知られた “bravery” を発揮したことになるが、本当は、“bravery” の反対、cowardice 即ち、臆病な行動をした人間の

物語となることをここで暗示していると考えられる訳である。

Hawthorne は Reuben Bourne をその moral cowardice に基づき行動させることにより、彼に罪意識を抱かしめ、彼を孤立させ、そして、総べての根本原因、“moral cowardice” を克服させることにより、彼を isolation から participation へと回帰させたと考えられる。この意味で、最初に述べたように、この作品は極めて Hawthorne 的な作品であるということができると思われる。

Bibliography 省略

(36) *Ibid.* p. 69.